

華岡青洲門人石堂鼎と妹背家

——華岡家を支え続けた功労者——

梶谷 光弘

島根大学医学部

受付：平成25年8月19日／受理：平成25年12月6日

要旨：石堂鼎は、寛政9年(1797)、華岡青洲が開いていた医塾「春林軒」へ入門した。文政元年(1818)頃、青洲の妻の実家妹背家では加恵の兄が亡くなり、跡継ぎの男子がいなかったため、石堂鼎を婿養子に迎えた。改姓した「妹背鼎」は「助教」、「知事」となって門人の指導・管理を行うようになった。一方、文政9年(1826)になって青洲の弟鹿城が病に伏せると、「妹背鼎」は「華岡鼎」と改姓し、そして「先生」として華岡家の経営に参画するようになった。さらに、青洲没後の一時期、華岡家のトップとして君臨し、華岡家を支え続けた。

しかし、天保11年(1840)5月、彼は「妹背氏一代」として妹背家に葬られた。

キーワード：華岡青洲門人、石堂鼎、妹背氏一代、妹背鼎、華岡鼎

1. はじめに

石堂鼎は越前国に生まれ、寛政9年(1797)閏7月2日、紀州平山に在った華岡家「春林軒」に入門した。才能に優れていたため、医塾を管理する「知事」の役職につき、文政10年(1827)、華岡鹿城(良平)が没した時、上田昌平、小川遊仙らを連れて大坂へ行き、「合水堂」(がっすいどう)を引き継いだ。自らが病に伏せたため、天保8年(1837)、平山に帰った人物として知られている¹⁾。

彼は華岡青洲(3代随賢)初期の門人であり、入門から亡くなるまでの約40年間華岡家に在塾し、また「知事」となって華岡家の門人指導や医塾管理に尽力した人物であるが、これ以上のことはわかっていない²⁾。

著者は、これまで門人である大森泰輔の在塾日記を基にして「春林軒」の実態を明らかにしたり³⁾、札幌市の華岡青洲末裔や大阪府の華岡鹿城末裔に残る史料を閲覧したりして、新しい事実を知ることができた。

そこで、本稿では、まず石堂鼎が「妹背鼎」、「華岡鼎」と改姓し、華岡家一族になっていた事実を明らかにする。

そして、後半では改めて彼の事跡を把握し、華岡家の門人から「助教」、「知事」と役職を替えた後、病身で高齢だった青洲を助けて「先生」としても活躍し、さらに青洲没後の一時期、華岡家のトップとして君臨し、次男修平(鷺洲)へ華岡家を引き継ぐために尽力した人物だったことを論ずるものである。

2. 青洲の妻加恵の実家妹背姓への改姓

(1) 妹背家の婿養子となった石堂鼎

華岡鹿城末裔が所蔵する「永代過去帳」には、次の記事が出てくる。

天保十一庚子年夏五月二日没

仙鼎院荊山重榮居士、石堂鼎、妹背氏一代⁴⁾

驚くことに、石堂鼎は、天保11年(1840)5月2日、「妹背氏一代」として、青洲の妻である加恵

写真1 「永代過去帳」(華岡鹿城末裔所蔵)

の実家妹背家の墓地に葬られ、その後も法要が行われていたのである。

法名は「仙傳院荊山重榮居士」、入門時の年齢を20歳前後とすると、彼は安永6年(1777)頃に生まれ、この時60歳半ばになろうとしていたのであろう。

(2) 加恵の妹との結婚

法名にある「重榮」という人物は、松木明知氏が行った妹背家の墓碑調査に出てくる人物と一致し⁵⁾、彼の妻である「小伝次(マツ)」は天保6年(1835)8月頃に亡くなり、「玉寿院桂室妙円大姉」として妹背家に葬られている⁶⁾。

つまり、法名に「重榮」を名乗る「妹背鼎」と「小伝次(マツ)」は夫婦であり、妻が「妹背鼎」より5年ほど早く亡くなったのである。

一方、青洲の妻である「加恵の同胞は二人で兄がいた」⁷⁾とあり、「小伝次(マツ)」の夫である「重榮」いわゆる「妹背鼎」が、宝暦12年(1762)生まれの加恵よりも一回りも年下だったことを考え

ると、「小伝次(マツ)」は加恵の妹にあたる⁸⁾。

したがって、加恵は、兄と妹の3人兄妹であり、石堂鼎は、加恵の妹と結婚して「妹背鼎」を名乗り、青洲の義弟となっていたのである。

しかし、天保6年(1835)8月頃には妻、そして10月には医学の師だった青洲も亡くなり、彼にとって、この年は家庭のみならず華岡家の経営においても大きな変化があった年である。

(3) 石堂鼎が妹背家へ婿入りした背景

名手の本陣を務め、「新蔵人」と称される家柄だった妹背家⁹⁾は、寛政4年(1792)から文化元年(1804)にかけて「名手組大庄屋」を務めていた¹⁰⁾。その間、加恵も婚家で青洲との間に子供が生まれ、順風満帆の頃であった。

ところが、加恵が57歳の時、文政元年(1818)4月の「拾五歳より六拾歳迄人数改」では、「(注。妹背)佐次兵衛」家の15歳以上60歳未満は「男一人、女二人」と報告された¹¹⁾。

この「女二人」は、加恵の母や華岡家に嫁いでいた加恵は該当しないため、加恵の実兄の妻と、「重榮妻」の「小伝次(マツ)」の2人であろう。

そして、「男一人」が、もし加恵の実兄ならば60歳近くになっていたはずだが、由緒ある家柄にもかかわらず、この時、彼は何も役職に就いていない¹²⁾。

また、その4年後の文政5年(1822)の「親類書」を見ると、加恵の実父である「妹背佐次兵衛」¹³⁾は、すでに没していたことが確認される。

天保7年(1836)3月、青洲亡き後、「小普請御医師 花岡修平」が書き上げた「親類書」(控え)1冊とその下書きと思われる1枚が、華岡鹿城末裔に所蔵されている。

この両方の「母方」に、「叔父」として「那賀郡市場村地土 妹背佐治兵衛」が一人だけ書かれている¹⁴⁾。この「妹背佐治兵衛」は、天保11年(1840)に没する「妹背鼎」であり、加恵の実父と実兄はすでに亡くなっていたものと考えられる。

こうした状況から推察すると、「拾五歳より六拾歳迄人数改」に出てきた「男一人」は加恵の実兄ではなく、妹背家に婿入りした「妹背鼎」であ

ろう。そして、文政元年（1804）の段階で、加恵の実兄はすでに亡くなり、跡継ぎの男子もいなかったため、石堂鼎が妹背家の婿養子に入ったものと思われる。

(4)「妹背鼎」の養子となった華岡南洋の実弟

天保9年（1838）11月から12月にかけて、「吉五郎後家ぬい訴願一件」の示談などに一役買った「妹背佐次兵衛」¹⁵⁾は、病のため大坂から帰省していた「妹背鼎」ではなく、当時38歳になっていた妹背佐治兵衛（重義）であった。

華岡鹿城末裔所蔵の「永代過去帳」にも、「妹背佐治兵衛重義」という人物が出てくる。

普明院俊哲重義居士
嘉永二己酉年九月十七日寂
妹背佐治兵衛重義
行年四十九歳、準平弟¹⁶⁾

この「妹背佐治兵衛重義」は、松木氏の妹背家系譜に出てくる「妹背佐次兵衛重義」と法名、没年月日、氏名が一致する¹⁷⁾。

「永代過去帳」の中で「準平弟」と記されていることから、華岡南洋（準平）の実家である奥家の史料を調べてみると、重義は「養子トナリ其女ヲ室トシ家督ヲ承継シテ佐次兵衛ト改称ス」¹⁸⁾とあり、「六代目の佐次兵衛」¹⁹⁾に間違いない。

「行年四十九歳」と記されていることから、「妹背佐治兵衛重義」は、享和元年（1801）の生まれであった。

つまり、上野村安楽川の奥家から華岡家の婿養子となった南洋と、妹背家の養子となった6代妹背佐次兵衛（重義）は、4歳ちがいの兄弟であり、南洋が53歳の時、弟の6代妹背佐次兵衛（重義）が兄よりも先に亡くなったのである。

ここで、6代妹背佐次兵衛（重義）から系図をさかのぼると、「妹背鼎」は5代妹背佐治兵衛、加恵の実兄は4代妹背佐治兵衛、加恵の実父は3代妹背佐治兵衛となり、6代妹背佐次兵衛（重義）は、5代妹背佐治兵衛（妹背鼎）の養子だったのである。

こうしてみると、50歳を過ぎた青洲と加恵は、長男雲平（葛城）と次男修平が順調に成長し、末弟の鹿城も大坂「合水堂」の経営をしっかりと行っており、華岡家は、医家として順調であり、青洲夫婦にとって至福の時であった。

だが、妹背家では4代妹背佐治兵衛が若くして亡くなり、跡を継ぐべき男子にも恵まれなかったため、文政元年（1818）頃、青洲らは、すでに40歳を過ぎ、華岡家で活躍し、将来を嘱望された石堂鼎に縁談の話を持ちかけ、妹背家の婿養子として迎えたのである。

3.「華岡鼎」への改姓

文政5年（1822）11月、青洲の末弟鹿城はまだ藩主への御目見を済ませていなかったが、青洲書き上げの「親類書」の中では「惣領」として長男である華岡雲平の前に書かれ、雲平は「次男」とされた²⁰⁾。

文政2年（1819）から同8年（1825）にかけて、青洲は鹿城へ宛てた書状の中で、15人扶持の奥医師を打診されたが、「近年病身ニ而歩行等不自由」²¹⁾、「老年ニ相成殊ニ病身……病氣保養之義も難相成」²²⁾と述べ、自分の健康に不安を感じ、鹿城へ何かと相談していた。

そして、青洲が病に伏せると、鹿城は平山に帰り、青洲に代わって「尾張津田郡」の伊八の欠唇手術を行ったりしていた²³⁾。

これは還暦を過ぎ、高齢による体力の衰えと、40歳代で煩った両脚の麻痺²⁴⁾の再発に苦しんでいたであろう青洲が、長男雲平はまだ華岡家の指導者となるべき資質を十分に備えていなかったため、自分の後継者は鹿城の他にはいないと考えていたからである。

ところが、文政9年（1826）冬になり、鹿城が病に倒れると²⁵⁾、青洲は「惣領除」を提出し²⁶⁾、「惣領」を解除した。これは、青洲の後継者として雲平が指名されたことを意味し、雲平の成長に期待をかけたのである。

翌10年（1827）4月28日に鹿城が49歳で亡くなり、その2年後の文政12年（1829）3月に出た「俳優準観隴陽医師才能世評発句選」を見ると、

そこには「外科 花岡鼎 中ノ嶋」²⁷⁾とあり、鹿城亡き後、「妹背鼎」が、「花(華)岡鼎」を名乗り、大坂「合水堂」を引き継いだことがわかる。

こうした状況から、「妹背鼎」が「華岡鼎」を名乗った時期は、鹿城が病に倒れ、「惣領」を解除される文政9年(1826)の年末から翌10年(1827)4月にかけての頃と考えられる。

それは同時に、それまで華岡家の医塾は華岡家の血族によって経営されていたが、この時点で「華岡家一族による医塾経営」へと移行したのである。

それは別の見方をすれば、「華岡家一族による医塾経営」という名目を維持するためには、「妹背鼎」に華岡姓を名乗らせる必要があったのである。

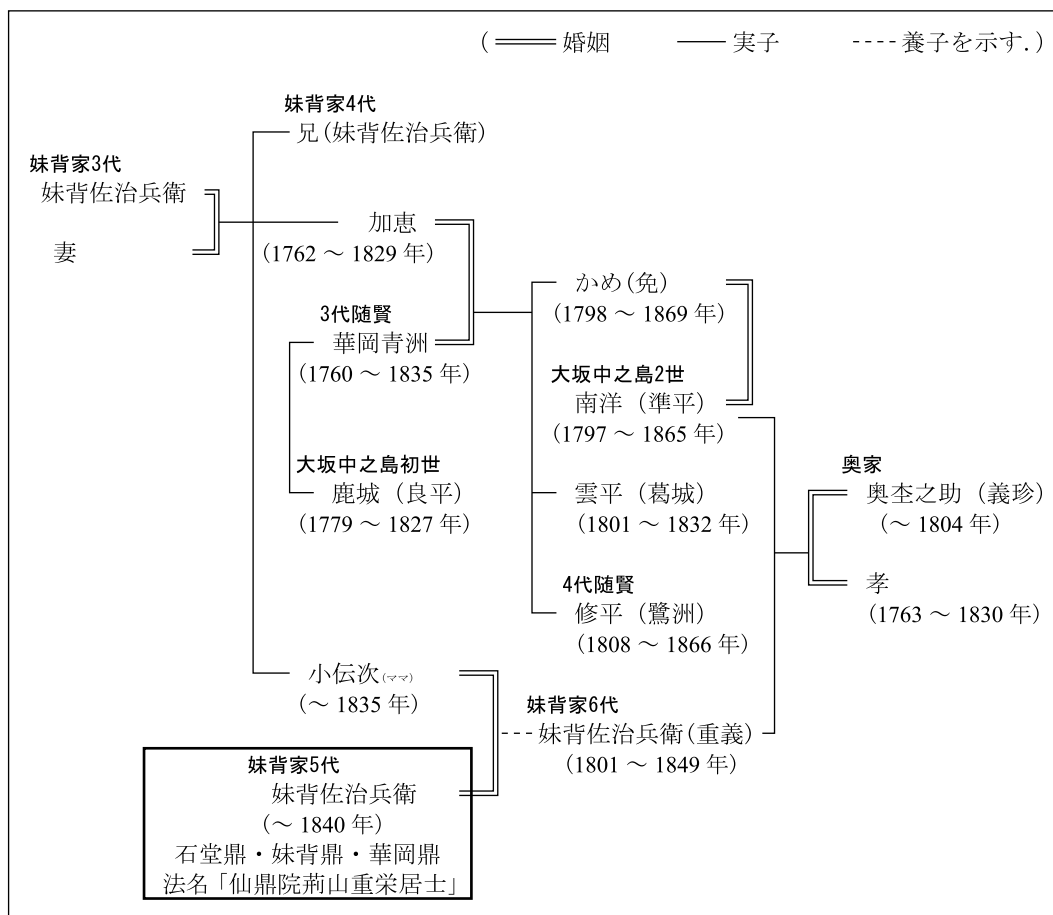
こうして、それまで塾事を担当していた「妹背鼎」は、「華岡鼎」と改称して華岡家一族となって医塾経営にも参画するようになり、青洲や雲平らと共に経営陣の一人となったのである。

4. 石堂鼎を取り巻く姻戚関係

石堂鼎が妹背姓、華岡姓に改姓していたことを踏まえ、彼を中心とした姻戚関係をまとめると、資料1のようになる。

こうして、「妹背鼎」は「華岡鼎」と改姓したものの、実際は華岡家の姻戚の婿養子にあたるため、華岡家から藩主に差し上げる「親類書」や「系譜」には詳しく触れられなかった。その結果、彼の動向はなかなか把握できなかったのである。

資料1 妹背家、奥家、華岡家の姻戚関係²⁸⁾



5. 華岡家において石堂鼎・「妹背鼎」・ 「華岡鼎」が果たした役割

石堂鼎が「妹背鼎」, 「妹背佐治兵衛」, そして「華岡鼎」と名乗った事実が明らかになったことにより, 改めて彼の役職と行動を追ってみる。

(1) 華岡家への入門

華岡家の「入門年次順門人録」によると, 石堂鼎は, 寛政9年(1797)閏7月2日, 華岡青洲がまだ乳癌手術に成功する以前の早い時期に, 平山に在った「春林軒」へ入門した。門人録には, 仲介する請人, 本人の住所・年齢などはまったく書かれていない²⁹⁾。

彼は, 京都での医学修業中から麻酔薬開発に意欲を燃やしていた青洲に注目し³⁰⁾, 越前から平山へ一人でやってきて, 青洲に直接入門を懇願したものである。

青洲への強いあこがれと新しい医学の修得にかける強い意気込みが想像される。

(2) 華岡家の「助教」, 「知事」

華岡家「春林軒」の門人となった石堂鼎は, 文化10年(1813)5月27日, 青洲が行った笹井岩之助の痔の診察・手術を「弟子」³¹⁾の一人として立ち会ったことであろう。

そして, 青洲が「毎朝五ツ時(今ノ午前八時)ニ察病寮へ出勤(カク称ヘタリ)セラレテ治療ニ従事シ, 塾生等ハ皆八時ヨリ十二時迄ソノ傍ニ待シテ見学」³²⁾する際, 青洲の次男修平とともに「助教」として青洲を助けた。

ここに長男雲平の名前がないのは, 文政2年(1819)8月2日に小普請医師を仰せつかった青洲が和歌山城下に出張所を設け³³⁾, この時, 青洲は平山に帰省し, 出張所は雲平に任せていたためであろう。

したがって, この「春林軒」の状況は, 文政2年(1819)8月以降の様子であり, 一時期, 両脚の麻痺を煩っていた青洲が³⁴⁾, 元気に診察や門人の指導などを行い, 同時にまだ幼い次男修平に自ら医学の手ほどきを行っていた頃と考えられる。

文政6年(1823)7月22日になり, 堺の山本謙蔵は, 「師家」の青洲と鹿城, 「知事」の石堂鼎へ「四季の儀礼」を差し出すことを門人へ示した³⁵⁾。

文政10年(1827)3月, 本間玄調が, 「南堀江五丁目 大津屋虎吉」を「受人」として「入門請負一札之事」を石堂鼎に差し出した時, 彼の役職は「華岡御知事」³⁶⁾だったが, 「妹背鼎」から「華岡鼎」に改姓する頃であり, すでに華岡家の重要人物と考えられていたのである。

こうして, 石堂鼎は, 入門して22年を経過した頃に「助教」, 26年を経過した頃に「知事」となり, 塾事を司る責任者になっていたのである。

(3) 華岡家の法要への対応

大坂「合水堂」で門人を指導していた鹿城が文政10年(1827)4月28日に亡くなると, 「妹背鼎」は「華岡鼎」と改姓し, 「華岡家知事」として, また青洲の義弟として, さらに青洲を支える華岡家の経営者の一人としてそこへ赴任した。

しかし, 現実是非常に厳しいものであった。

当時, 青洲は68歳の高齢であり, 健康の不安を抱えながら毎月和歌山と平山を往復していた。そして, 27歳になった雲平は, 青洲の後継者になるため, ひたすら医学修業に励んでいた。そんな中, 華岡家の経営を一手に引き受けたのは50歳になったばかりであろう「華岡鼎」であった。

彼が華岡家一族として尽力した一例が, 華岡家の葬儀と法要への対応であった。(資料2参照)

文政12年(1829)に義姉加恵が亡くなったことに続き, 甥の雲平, 義兄の治兵衛, 姪の於種, 於栄, 義兄の良応, 最愛の妻, そして天保6年(1835)には青洲が亡くなった。加えて, 義父直道, 義母於継らの法要も次々と行わねばならなかった。その上, 墓地も平山の自家, 大坂宝珠院, 高野山など, 数カ所に広がっていた。

この他, 平山の「春林軒」, 大坂の「合水堂」, 和歌山の出張所などの管理・運営, 門人の管理・指導, また妹背家の家長として名手本陣の務めをはじめ, 一族や地域のことなども行わねばならなかった。

そのため, 彼は「合水堂」の経営に専念できる

資料2 「華岡鼎」を取り巻く華岡家一族の動き³⁷⁾

年号	西暦	できごと
文政10年	1827	4月28日 華岡鹿城が病没し、本家の墓地に土葬する。(行年49歳) そのため、青洲の指示で大坂へ引っ越す。 この年、華岡雲仙の妻於勝の70回忌の法要を行う。
文政11年	1828	この年、青洲の叔母於留の27回忌の法要を行う。
文政12年	1829	12月8日 青洲の妻加恵が亡くなり、本家の墓地に葬る。(行年68歳)
文政13年 天保元年	1830	2月6日 華岡南洋の実母孝が亡くなる。(行年68歳) この年、華岡直道(ママ)、於継(ママ)、小陸(ママ)の法要を本家で行う。 この年、小弁の33回忌、奥柰之助の27回忌、加恵の1周忌の法要を行う。 この年、友三郎の法要を行う。 この年、栄治郎の法要を大坂の宝珠院で行う。
天保2年	1831	この年、華岡直道、加恵の3回忌の法要を本家で行う。 この年、華岡南洋の実母孝の1周忌の法要を行う。
天保3年	1832	8月19日 華岡青洲の嫡嗣雲平が亡くなる。(行年32歳) この年、華岡南洋の実母孝の3回忌の法要を行う。
天保4年	1833	3月2日頃 「大坂花岡鼎先生」を名乗り、紀州平山若旦那(雲平)死去による1周忌の追善を行う。 4月7日 華岡青洲の弟治兵衛が亡くなる。 4月24日 華岡青洲の妹於種が亡くなる。 この年、華岡鹿城の7回忌の法要を本家で行う。
天保5年	1834	5月27日 華岡青洲の娘於栄が亡くなる。(行年29歳) この年、華岡雲平の3回忌、青洲の叔母於留の33回忌の法要を行う。
天保6年	1835	6月19日 華岡青洲の弟良応(高野山正智院一代)が亡くなり、高野山に土葬する。 8月21日 良応の師乗如が亡くなり、高野山に葬る。 8月 妻が没する。 10月2日 華岡青洲が亡くなる。(行年76歳) この年、加恵の7回忌の法要を本家で行う。
天保7年	1836	3月 花岡修平より藩へ「親類書」が提出され、「叔父」と記される。 5月晦日 大森加善に対して「華岡鼎」の名前で塾頭を命ずる。 この年、良応の1周忌、乗如の1周忌の法要を高野山で行う。 この年、青洲の1周忌の法要を本家で行う。 この年、奥柰之助の33回忌、華岡南洋の実母孝の7回忌の法要に出かける。
天保8年	1837	病のため、大坂から平山に引っ越す。 この年、良応の3回忌、乗如の3回忌の法要が高野山で行われる。 この年、青洲の3回忌の法要が本家で行われる。 この年、華岡文蔵の妻於六の50回忌の法要が行われる。

状況ではなかった。

実際、天保4年(1833)3月から大坂「合水堂」で医学修業を行った出雲国の大森泰輔は、約3ヶ月の修業中、「華岡鼎」に会うことは一度もなかった³⁸⁾。

こうして、「合水堂」を任された「華岡鼎」ではあったが、実際は「合水堂」を不在にすることが多かった。そのため、文政10年(1827)から天保7年(1836)までの10年間、「合水堂」への入門

者数はわずか30人ほどであり、「家声少微」³⁹⁾という厳しい状況であった。(資料3参照)

(4) 入門を世話する「請人」、「受(人)」

華岡家の「入門年次順門人録」には、文政4年(1821)から天保3年(1832)にかけて、「請人」・「受(人)」として、石堂鼎、「妹背鼎」、「妹背佐治兵衛」、「華岡鼎」の名前が散見される。

資料3 「合水堂」への入門者数の推移⁴⁰⁾

年号	文政10年	文政11年	文政12年	天保元年	天保2年	天保3年	天保4年	天保5年	天保6年	天保7年
人数	4人	2人	0人	1人	0人	0人	1人	3人	9人	10人

同年（注. 文政4年）五月二十四日
越前鯖江 問鍋下総守家中 窪田哲斎
請 石堂鼎⁴¹⁾

文政九年正月十三日
和州添上郡樺本村 中村三枝
受 名手市場 妹背鼎⁴²⁾

文政十丁亥正月廿五日
駿州富士郡大宮町 遠藤幾三
請人 石堂鼎⁴³⁾

同年（注. 天保2年）三月十八日
泉州堺府 林元恵 字子迪
請人 妹背佐治兵衛⁴⁴⁾

同年（注. 天保3年）四月十三日
播州揖西郡正条 三輪敬斎
請人 華岡鼎⁴⁵⁾

安政四年三月二十九日
紀州那賀郡麻生津 土屋□□ 改秀橋
請人 妹背佐治兵衛⁴⁶⁾

2番目の記事は、住所が「名手市場」となっており、加恵の実家が在った妹背家と同じであり、彼が婿入りした事実と一致する。4番目の天保2年（1831）に林元恵の入門を世話した「妹背佐治兵衛」も、5代妹背佐治兵衛、「妹背鼎」である。

ところが、6番目の安政4年（1857）に土屋秀橋を世話した「妹背佐治兵衛」は、「妹背鼎」が天保11年（1840）に亡くなっていることから考えて、6代妹背佐治兵衛（重義）である。

越前国から遊学してきた彼が、多くの商人に混じって門人の保証人を務めるようになったことは、その頃の彼には人物としての信用に加えて、

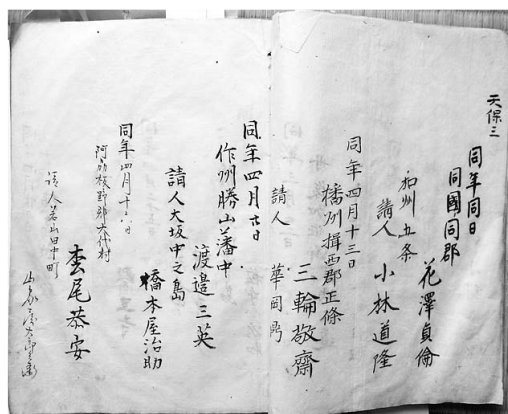


写真2 「入門年次順門人録」（華岡青洲末裔所蔵）

経済的なゆとりもあったと考えられ、その背景には彼の妹背家への婿入りや華岡姓への改姓などがあったものと考えられる。

ただこの時期、彼は4つの名前を混用しているが、その理由は不明である。

(5) 華岡家の「先生」

文政10年（1827）頃から「華岡鼎」を名乗り、文政12年（1829）3月の「俳優準観隴陽医師才能世評発句選」では「外科 花岡鼎 中ノ嶋」と紹介された。しかし、彼の名前が掲載されたのは、この時だけであった⁴⁷⁾。

一方、出雲国の在村医大森泰輔が、天保4年（1833）正月に地元を出発し、平山、和歌山を経由して3月2日に「合水堂」へ入門し、その後約3ヶ月間にわたって医学修業を行った様子を記録した「他国雑記」には、次のような記事がある。

紀州平山若旦那御死去
大坂花岡鼎先生追善⁴⁸⁾

これは泰輔が「合水堂」へ入門した頃、「花岡

鼎」が、前年に亡くなった「紀州平山若旦那」である長男雲平の1周忌の法要を取り仕切ったことを書き留めたものである。

青洲の後継者として大きな期待を背負っていた長男雲平が、天保3年(1832)8月19日、32歳という若さで亡くなった。この時、73歳だった父青洲の悲しみがいかに大きなものであったか、青洲の憔悴ぶりが想像される。

それは同時に、それまで青洲を支えてきた雲平と「妹背鼎」の3人体制の一角が崩れ、青洲と「華岡鼎」の2人体制となったことを示すものであった。

したがって、「華岡鼎」が「先生」と呼ばれるようになったのは、長男雲平が亡くなった天保3年(1832)頃からだと考えられる。

(6)「南洋先生」による診察・治療

天保4年(1833)、大坂「合水堂」で約3ヶ月修業した大森泰輔は、「華岡鼎」に会えないばかりか、華岡家一族から直接華岡流医術を教わることがなかったため帰国した。

そして、翌年(1834)2月、再び華岡家で修業するため、出雲国を出発した。今度の行き先は紀州平山の「春林軒」であった。

「春林軒」にやってきた泰輔は、「紀州花岡家塾則録」に従い、「束修 金百疋」,「塾金 金百疋」,「両知事 金一朱宛」,「塾頭 金一朱」の他、「修平様」「準平様」へ「南録一片」を差し出した⁴⁹⁾。

当時の「春林軒」は、次男の華岡修平27歳と、24歳の時に華岡家へ入門し⁵⁰⁾、吉益家でも修業した南洋(準平)38歳の2人が担当していた。

それから7年前の文政10年(1827)当時、南洋は、「紀州伊東(都)郡名手平山[村]之人」「奥順平」を名乗って吉益家へ入門した⁵¹⁾。この時の彼の住まいは、奥家が在る上野村安楽川から華岡家が在る名手平山村へ変わっており、彼は「春林軒」に在塾したまま、京都の吉益家での医学修業を行っていたものと考えられる。

そして、彼とかめの子供である完平(青洋)が、文政11年(1828)に生まれたことから考えると⁵²⁾、その前年の文政10年(1827)にはすでにかめの

婿養子となり、青洲が、将来の華岡家を託すため、吉益家での修業を命じたのかもしれない。

しかし、天保5年(1834)の「紀州花岡家塾則録」には、「華岡鼎」の名前はなく、大坂「合水堂」を任されたままだったと考えられる。

「春林軒」に来て数日後の3月13日、大森泰輔は早速、南洋の手術に立ち会うことができ、その数日後には、青洲の「乳岩」手術にも立ち会うことができた。

当時、「春林軒」では、青洲を「老先生」,「青洲先生」,南洋を「南洋先生」,「先生」などと呼び⁵³⁾、在塾する36人の門人が青洲と南洋から直接華岡流医術と薬方を教わっていた。

天保5年(1834)8月2日になり、36人の門人中、高松涛亭、中原久佐ら12人が、「華岡青洲先生」と「華岡南洋先生」の2人へ「奥伝誓約之事」を差し出した⁵⁴⁾。

こうした事実から推測すると、「春林軒」の門人であった「奥順(準)平」は、早くから将来を嘱望され、文政10年(1827)中には、青洲の長女かめの婿養子となり、義父の青洲から命ぜられて京都の吉益家で修業し⁵⁵⁾、まもなくして華岡姓を名乗ったのである。

そして、長男雲平が亡くなると、青洲は次男修平を「春林軒」に在塾させるだけでなく⁵⁶⁾、華岡姓を名乗った華岡南洋も指導陣に加え、華岡青洲と華岡南洋の2人が、在塾する門人へ医術を伝授していたのである。

こうして、天保3年(1832)までの青洲、雲平、「華岡鼎」の3人体制は、雲平の没後、青洲、「華岡鼎」、華岡南洋の体制となったのである。

この青洲、「華岡鼎」、華岡南洋の新たな3人体制がこれまでと異なることは、青洲を支える2人が、いずれも華岡家と姻戚関係にあったことである。しかし、2人とも「華岡」姓を名乗り、「華岡家一族による医塾経営」という名目は維持したのである。

(7) 華岡家のトップ

天保6年(1835)正月には泰輔の二度目の修業・帰国と入れ替わるように、婿養子加善が「合

水堂」へ入門した。

しかし、この年の10月には青洲が76歳で亡くなったが、加善はそのまま「合水堂」において修業を続け、翌7年（1836）3月に「張替役」、5月には「塾頭」を命じられた。

その時の任命書である「一札之事」には、「此度其方江塾頭相頼申候間、治療宜敷様一入頼入候」、「天保七申五月朔日、華岡鼎（花押）、大森加善殿」⁵⁷⁾と書かれている。

なかなかの達筆であり、「華岡鼎」の教養の高さが感じられる。

この時、華岡青洲の次男修平がいながら、また、娘婿の華岡南洋がいながら、「華岡鼎」が外科手術に優れた大森加善を「塾頭」に任じた⁵⁸⁾ことは、青洲亡き後の華岡家最大の危機の中、青洲から後事を託された「華岡鼎」が華岡家のトップになっていたからだと考えられる。

こうして、「華岡鼎」は華岡家のトップとして君臨したが、まもなくして藩から華岡修平が青洲の後継者として認められ、「四代随賢」を名乗ったため、その地位を譲ったのである。



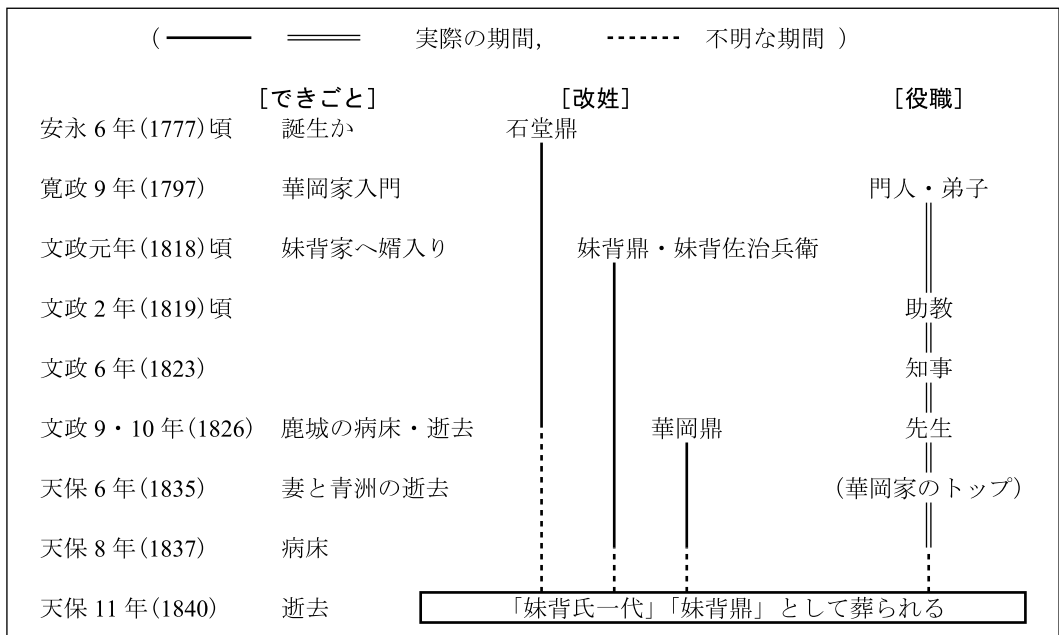
写真3 大森加善宛塾頭任命書「一札之事」
(島根大学附属図書館医学図書館「大森文庫」所蔵)

6. まとめ

石堂鼎の役職の動きを見ると、彼は文政2年（1819）頃に「助教」、同6年（1823）に「知事」、文政9年（1826）頃に「先生」の役職となった。同時に、「請人」・「受（人）」として入門する門人の保証人も務めていた。

一方、彼の改姓の動きを見ると、文政元年

資料4 石堂鼎の改姓と役職の推移⁵⁹⁾



(1818)4月にはすでに「妹背鼎」,「妹背佐治兵衛」を名乗っていたが,それから天保2年(1831)にかけて,それらに加えて石堂鼎も混用していた。

石堂鼎に関わる改姓と華岡家における役職の推移をまとめると,資料4のようになる。

鹿城に続き,義姉の加恵,甥の雲平をはじめ青洲までが相次いで亡くなり,華岡家は窮地に陥った。その間,「妹背鼎」は「華岡鼎」を名乗り,華岡家の「先生」としても活躍し,青洲没後は,一時期ではあったが,華岡家の経営のトップとして君臨した。そして,まもなくして次男修平が「四代随賢」を襲名し,華岡南洋も大坂「合水堂」で指導するようになり,華岡家は最大の危機を乗り切ることができた。

だが,青洲がそれまで考えていた華岡家の血族による医塾経営は,青洲の後継者と目されていた鹿城や雲平が若くして亡くなったことにより,姻戚関係まで広げた華岡家の一族から経営者を選ぶ必要に迫られたのである。

「先生」という役職に就き,経営者の一人となった「華岡鼎」は,「日本第一」⁶⁰⁾の華岡家を守るために奮闘した。

しかし,彼もまた跡継ぎの男子ができなかったため,上野村安楽川の奥家から華岡南洋の実弟を養子に迎えなければならなかった。

そして,天保8年(1837)に病に倒れ,それから同11年(1840)に没するまでの動向はまったくわからない。

7. おわりに

石堂鼎の人生を振り返ってみると,華岡青洲と華岡家とともにあり,人生のすべてを華岡家のために捧げ,華岡家の維持・発展に関わった陰の功労者であった。

それは,青洲の末弟鹿城と長男雲平が青洲よりも早く亡くなったため,青洲が守ってきた血族主義は一族主義へ移行しなければならない内部的事情によるものであった。

しかし,彼は,その狭間で全力を尽くして華岡家のために努力した。同時に,妹背家の維持・繁栄にも尽力した。

今後,華岡青洲が残した稿本等を通して,医学や医塾経営に対する考え方を深く検討するとともに,石堂鼎と同じような立場だった華岡南洋の生き方についても把握していきたいと考えている。

謝 辞

大量の史料を閲覧・写真撮影させていただいた札幌市在住の華岡青洲末裔の皆様,大阪府在住の華岡鹿城末裔の皆様,史料閲覧の便宜を図っていただいた島根大学附属図書館医学図書館の皆様にお礼を申し上げます。

また,事前に原稿を見ていただいた妹背家,華岡家・奥家のご子孫である堺市の森田様,奥家のご子孫である堺市の奥様,東京都の華岡様,弘前大学名誉教授松木明知先生,和歌山市立博物館総括学芸員高橋克伸様,妹背家と連絡をとっていただいた紀の川市教育委員会をはじめ,多くの方々にたいへんお世話になりました。

紙面を借りて,皆様に心よりお礼を申し上げます。

文 献

- 1) ①呉秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京:大空社; 1994. p.112-122
②森慶三・市原硬・竹林弘. 医聖華岡青洲. 和歌山: 医聖華岡青洲先生顕彰会; 1964. p.183
なお,「合水堂」の読み方について華岡鹿城末裔の方に尋ねたところ,「がっすいどう」と読むとのことであった。そして,故華岡ヒエ氏も「がっすいどう」と読まれたとのことであった。
- 2) 福井県医師会編. 福井県医学史. 福井: 創文堂; 1968. p.205
「華岡医塾門人録」に名前が記載されているのみで,彼に関してはまったく記述がない。そのため,地元で活躍していないものと考えられる。
- 3) ①拙稿. 天保五年当時の華岡家「春林軒」における医学修業の実態について一大森泰輔(不明堂三楽)の塾中日記「南遊雜記一・二」の翻刻一(1). 古代文化研究2007;15
②同(2). 同2008:16
- 4) 永代過去帳. 華岡鹿城末裔所蔵;17丁
- 5) 松木明知. 華岡青洲の新研究. 東京:岩波出版; 2002. p.95
- 6) 文献4)
- 7) 文献5) p.97

- 8) 上山英明『華岡青洲先生その業績とひととなり』には、「加恵は妹背家の次女」と書かれている。(p.13)
- 9) 那賀町華岡青洲をたたえる会。華岡青洲。東京：帝国地方行政学会；1972。p.68-69
- 10) 那賀町教育委員会。那賀町史料。東京：第一法規；1970。p.73-134
- 11) 文献10) p.163
- 12) 文献10) p.165
- 13) 和歌山市立博物館。華岡青洲の医塾 春林軒と合水堂。和歌山：和歌山市教育委員会；2012。p.91
- 14) 花岡修平書き上げ。親類書控。華岡鹿城末裔所蔵同。親類書下書き。華岡鹿城末裔所蔵
- 15) 文献10) p.344-347
- 16) 文献4) 22丁オ
- 17) 文献5) p.92
「佐治兵衛」と「佐次兵衛」と漢字が一文字異なるが、読み方は同じである。
- 18) 奥家家譜。堺市奥氏所蔵
- 19) 文献5) p.96
- 20) ①文献13) p.12, p.91-92
②古西義磨。幕末大坂の医学塾に関する一考察—適塾と華岡塾・合水堂を中心に—。近畿大学日本文化研究所編。日本文化の様相—その継承と創造—。名古屋：風媒社；2006。p.148
青洲の養子となっていた鹿城は、享和元年(1801)に長男雲平が生まれたため養子を退身したはずだが、その後、いつ、どういう理由で「惣領」となったかは不明である。
- 21) 書状(宛名、年月日不明)。華岡鹿城末裔所蔵
- 22) 華岡隨賢より良平宛書状。十一月十八日付。華岡鹿城末裔所蔵
- 23) 文献1) ② p.97
- 24) 文献1) ② p.299
松木明知。華岡青洲研究の新展開。東京：真興出版；2013。p.162-163
- 25) 文献1) ① p.111
- 26) 文献13) p.92
- 27) 古西義磨索引・解説。大坂医師番付集成。俳優華観隴陽医師才能世評発句選(文政十二歳丑三月)。京都：思文閣；1985。14
- 28) 前述の内容と華岡鹿城末裔所蔵の「万永過去帳」・「華岡先祖」・位牌により作成。
そのため、「かめ(免)」の生年は、「過去帳」や位牌から「寛政10年(1798)」と判断した。
なお、妹背家の当主については、松木氏の調査から、妹背佐治兵衛(重義)を6代とした。
- 29) ①高橋克伸校訂。華岡家所蔵「門人録」翻刻資料。青木歳幸・岩淵合治編。国立歴史民族博物館研究報告116。千葉：国立歴史民族博物館；2004。p.498
②拙稿。華岡鹿城末裔所蔵の「華岡門人録」について(2)。日本医史学雑誌2012；58(3)：404
- この他、文献1) ①(p.472)・②(p.318)などにも記載がある。
- 30) 宗田一。華岡青洲をめぐる最近の知見。和歌山市立博物館編。近世日本医学と華岡青洲。和歌山：和歌山市教育委員会；1992。p.54-61
高橋均・松村巧。華岡青洲自筆「丸散便覧序」考—現代語訳および注解—。近畿大医誌2000；25(1)：164
文献1) ① p.51
- 31) 佐藤利夫編。海陸道順達日記。東京：法政大学出版局；1991。p.145-151
- 32) 文献1) ① p.78
- 33) 文献1) ① p.80-82
- 34) 文献1) ②所収の「華岡青洲年譜」によると、享和3年(1803)から翌年にかけて、両脚の麻痺症に苦しんでいた。(p.299)
- 35) 文献1) ② p.191
- 36) 文献1) ① p.445-446
- 37) 上述の内容と「万永過去帳」、「永代過去帳」により作成。
- 38) 大森不明堂。他国雑記。島根大学附属図書館医学図書館大森文庫所蔵
- 39) 文献1) ① p.117
- 40) 文献29) ② 2012-2013；58(1), (3), (4), 59(1)により作成。
文献1) ①所収の「華岡青洲先生春林軒門人録」から作成した数字を見ても、文政10年から天保7年までは、10人、6人、0人、0人、7人、1人、6人、4人、9人、9人、計52人である。(文献20) ② p.149)
- 41) 文献29) p.523
- 42) 文献29) p.531
- 43) 文献29) p.533
- 44) □海門□□□(注。「入門年次順門人録」)。華岡青洲末裔所蔵。11丁オ
- 45) 文献44) 21丁ウ
- 46) 文献44) 139丁ウ
- 47) 文献27)
天保3年、天保4年の出版物に「花岡良平」が掲載されている。「良平」を名乗る人物は、華岡鹿城と華岡乙平(積軒)だが、この人物を断定することができなかった。
- 48) 島根大学附属図書館医学分館大森文庫出版編集委員会編。華岡流医術の世界。出雲：ワン・ライン；2008。p.54
- 49) 文献3) ① p.76
- 50) 文献1) ① p.116
- 51) 町泉寿郎。吉益家門人録(4)。日本医史学雑誌2002；48(2)：235
- 52) 文献1) ① p.118
- 53) 文献3)
- 54) 文献26) p.37
- 55) 文献1) ①には、「青洲先生没セラレシトキ」(p.105)

- と書かれているが、それよりも早く婿養子になっていた。
 56) 文献51)の天保2年には「華岡荘平」の名前があり、華岡修平と推測されるが、断定できなかった。また、和歌山出張所への行き来についても明らかにできなかった。
 57) 島根大学附属図書館医学図書館大森文庫所蔵
 58) 文献48) p.207-238
 59) 著者作成
 60) 文献48) p.113

Ishido Kanae, a Scholar at the Hanaoka Seisyu Medical Institute, and the Imose Family: A Contributor Who Supported the Hanaoka Medical Institute

Mitsuhiro KAJITANI

Faculty of Medicine, Shimane University

Ishido Kanae entered the medical school *Syunrin-ken* which Hanaoka Seisyu established in the intercalary year of 1797, the ninth year of the Kansei era. In 1818, the first year of the Bunsei era, in the Imose family of Seisyu's wife, Kae, Kae's older brother died. They had no sons who could carry on the Imose name. Ishido Kanae married into the Imose family. Imose Kanae changed his family name to "Imose", and managed the Hanaoka Medical Institute, holding positions such as assistant professor and dean. In 1826, the ninth year of the Bunsei era, Rokujiyo, Seisyu's younger brother, became sick. Imose Kanae changed his family name to "Hanaoka" and managed the medical school as *Sensei*, a professor. After Hanaoka Seisyu's death, Hanaoka Kanae became the head doctor and supported the Hanaoka Medical Institute.

But in May, 1840, the eleventh year of the Tenpou era, Hanaoka Kanae was buried in the Imose grave plot as Imose-shi Ichidai, one generation of the Imose family.

Key words: members of Hanaoka Seisyu medical group, Ishido Kanae, Imose-shi Ichidai, Imose Kanae, Hanaoka Kanae